

# Responsible Care NEWS

2021 春季号



レスポンシブル・ケア®



# from Members

## カーボンニュートラル達成に向けて、リアリティのあるシナリオを描けると

### 三菱ガス化学株式会社

#### 従業員を大切にす会社

——三菱ガス化学の概要について聞かせてください。

**稲荷** 当社は天然ガスを利用してメタノールを生産する事業からスタートし、今年で三菱ガス化学として創立50周年を迎えました。現在は地熱や天然ガス発電などのエネルギー事業、メタノール・キシレン、特殊芳香族、各種エンプラ、電子材料、脱酸素剤「エージレス」といった上流から下流までの多彩な事業を展開しています。その中で競争優位な事業の強化と不採算事業の再構築、新規事業の創出を掲げてポートフォリオ改革を進めています。エージレスは社内ベンチャー的にマーケットインの発想から生まれた事業ですが、鮮度保持剤として食品ロス低減に大きく寄与しており、日化協のSDGs事例集に最初に取り上げられました。連結売上高は約6,000億円で利益が300億円前後、コロナ禍の影響により自動車関連製品を中心に低迷した時期もありましたが、巣ごもり需要等で好調な電子材料分野、スマホレンズ用光学材料ポリマーに支えられ、現在は回復基調にあります。

——企業理念・経営方針は？

**稲荷** 「社会と分かち合える価値の創造」をグループミッションとして、社会の持続的な成長に貢献し、企業価値を向上することを目指しています。具体的には、CSR推進室を中心にマテリアリティを策定し、CSR経営の充実に取り組んでいます。当社の特徴は、社会貢献を果たす前提として従業員を大切にしていることです。



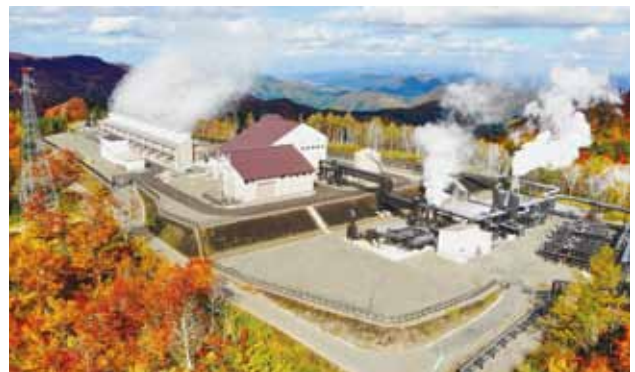
水素製造装置(メタノールから水素を製造)

これは、自分を大切にできなければ、他者や社会も大切にできないという思想に基づくものです。社内の風通しが非常に良く、RC活動においても現場が主体的に取り組むことで工場ごとに個性が発揮され、切磋琢磨する形になっています。またRCの仕組みが現場に浸透・定着しているため、CSRやSDGsといった新しい概念についても、6つのコードに網羅的に取り組んできた中で活動に対する意味付けが増えたという感覚です。RC活動を充実・深化させることがCSR、SDGsに繋がるという受け止め方で、現場に大きな混乱はありませんでした。むしろ改善意欲が向上し、事故トラブル低減、GHG排出削減等に寄与したのではないかと感じています。

#### 経営課題やリスクにマッチした仕組

——現場が主体となった理想的な活動という訳ですね。

**稲荷** 工場ごとに扱う製品が異なるので取り組み方に多少の質の違いはありますが、必ずRCの6コードに合致します。上手く展開すれば、会社の経営課題やリスクにマッチするような仕組になっており、RCの手法は極めて有効なシステムだと思います。例えば安全に関しては、現場で何が危険かということを正しく認識しなければ、本質的な予防措置は講じられません。トップダウンでルールを定めたり、ツールを提供したりすることはできても、全ての危険を指摘することは不可能です。そこで機能するのがRCの保安防災、労働安全衛生のコードです。ただし当社においても課題はあり、その一つが協力会社の問題です。RCの仕組みを全て適用することは難



山葵沢地熱発電所(秋田県湯沢市)

# 考えています。

取締役 常務執行役員 稲荷 雅人さん



しい面もあり、試行錯誤を重ねながら諦めずに対応していくしかないと思っています。

——カーボンニュートラルの実現性についてはいかがですか。

**稲荷** 当社はGHGに関する2030年目標を2013年比36%減、2050年にカーボンニュートラル達成という方針を公表しています。天然ガスは化石燃料ですが、主成分であるメタンは最も水素含有率の高い炭化水素で、CO<sub>2</sub>をキャンセルする負担が少ないと言えます。当社ではメタンから派生したメタノール・アンモニア事業を背景にC1化学を深く追求し、水素製造装置や燃料電池については既に事業化しています。一方で、メタノールやアンモニアは来るべき水素社会において発生場所から使用場所へのキャリアとなり、エネルギー備蓄媒体としても優れています。当社は天然ガス掘削の経験や地質学的な知見も保有しているので、これまで取り組んできたCCUやCCS、地熱発電を組み込むことにより、カーボンニュートラル達成に向けてリアリティのあるシナリオを描けると考えています。

## SMART-MGCプロジェクト

——現場の安全活動、教育・研修等にコロナ禍の影響は出ていますか。

**稲荷** 安全に関する会議をオンラインで実施する等、従来通りという訳にはいきませんが、活動自体に停滞感は見られません。化学知識の習得と安全性の向上を目的とした化学塾も一時開講を見合わせていましたが、間もなく再開する予定です。結局、現場が自律的に活動しているか否かが問われる局面となり、幸いにも日頃から自分達で考えて動く姿勢が身に付いていたので、ある程度凌ぐことができたと感じています。

——現在、力を入れている活動はありますか。

**稲荷** DXを活用した「SMART-MGC」というプロジェクトを展開しています。そのアイテムの一つである外部腐食診断システムは2018年度にRC審査員特別賞を受賞しましたが、これに満足することなく設備管理・運転管理・生産管理に関わる様々なシステムの連携や情報の高度な解析を更に進化させ、事故・災害を未然に

防止していきたいと思っています。個別の活動においては、火災に対するリスクの抽出に力を入れています。グループ会社にはいろいろな業態があるので、プロセス火災のみならず機械設備の火災についても潜在リスクの特定、低減に努めています。また、RCの中ではあまり注目されないテーマかもしれませんが、生物多様性の維持・保全も重要な課題だと認識しており、今後、一定の投資をして取り組んでいく計画です。

## RCはトータルソリューションとなり得る

——今後の目標を聞かせてください。

**稲荷** 最初にお話したグループミッションの実現やCSR経営を推進する中で、個を大切にしていく会社でありたいと考えています。全体ももちろん重要ですが、一人一人の個性・感性を尊重することも忘れないようにしたいですね。

——日化協RC委員会に対する要望はありますか。

**稲荷** RCは網羅的でありながら総花的ではなく要所を押さえており、現場への浸透性の高い活動だと思います。SDGsをはじめとする各種のESG戦略をほとんどカバーし、現場で実践することが可能です。更に、ファンタジーになりがちな長期的な環境政策を日常業務に落とし込む際にも、極めて有効な仕組みであると感じています。ツールとしてDXを交えることができれば、この分野のトータルソリューションとなり得るのではないのでしょうか。成果の公表だけではなく、RCの内容そのものをサステナブルな基幹システムとして、他の業界や社会にアピールしていただきたいと思っています。



化学塾(化学知識の習得と安全性の向上を目的とした体験型研修)

### 事業所の概要

1915年に日本で最初のソーダ電解事業を開始した当社ですが、戦後になって有機化学分野へ進出し、1952年にはこの松山工場の操業を開始しました。

松山工場の主な製品としては、無機製品では祖業のソーダ電解から生み出されるかせいソーダや塩素ガス、有機製品ではネオアリルGをはじめとするアリルエーテル類が世界でも有数のシェアを誇り、またUVインキ等の原料にも使われているDAP(ジアリルフタレート)樹脂は2014年に経済産業省の「グローバルニッチトップ(GNT)100選」に選ばれています。



工場全景(敷地面積 坊っちゃんスタジアム12個分)

### レスポンスブル・ケア活動

「独創的な技術と製品により安心で豊かな社会の実現に貢献します」というグループ企業理念に基づいて、レスポンスブル・ケア活動を積極的に推進しています。

#### 【松山工場のRC活動】

大阪ソーダでは毎年全社共通のRC方針を定め、この方針の下に各工場のRC目標を作成し、さらに職場ごとの目標に落とし込んで、安全、品質、環境保全の分野で日々の活動を行っています。

安全については労働災害ゼロを目指し、その一環として5S活動の推進を図っています。単なる整理整頓で終わるので



緊急時初動対応訓練の様子

はなく、活動を工夫して積極的に取り組み、従業員の意識向上による行動変化をもたらすことで、安全意識向上・生産性向上・設備改善の達成を目指し、職場ごとに取り組んでいます。また保安防災活動では、「工場内のいかなる作業にも常に危険が潜む」との考えを従業員、協力会社作業員の一人一人が心に刻み、事故・トラブルゼロを目指して様々な活動を行っています。例えば、休日夜間に事故が発生した場合や原料・製品が漏洩した場合の緊急時初動対応訓練を毎月実施しています。

品質については、松山工場では1995年にISO9001の認証を取得し、「お客様の満足する製品をつくります」を品質方針とした継続的な活動を行っています。最近では、お客様に提供する製品の品質に影響を与えうる変更に対する4M【Man(人)、Machine(機械)、Method(方法)、Material(材料)】変更管理の定着と強化を図っています。

また2001年にISO14001の認証を取得し、環境保全活動に取り組んでいます。瀬戸内海に面した松山工場では松山市と環境保全協定を結び、排水や排ガスなどの排出基準について法的要求よりもさらに厳しいレベルで自主管理基準を設け、環境にやさしい工場を目指して工場一丸となって日々の業務を行っています。

### 地域とのコミュニケーション

コロナ禍の影響で2020年度は残念ながら中止となりましたが、毎年10月に行われている地元の「松山地方まつり」では、地元自治会による御神輿が工場内を練り歩いたり、獅子舞が工場内事務所前で舞われたりするなど、地域の皆様との交流を深めています。

化学工場で大きな事故が発生した場合には、工場内だけではなく地域の住民の皆様にも多大なご迷惑をおかけするリスクがあります。松山工場では地域の皆様の安全はもとより、地域の皆様にご理解いただける工場を目指し、今後もレスポンスブル・ケア活動を続けていきます。



獅子舞披露



御神輿の練り歩き

### 事業所の概要

住友化学(株)は1913年、住友が経営する銅の製錬所で問題となっていた煙害を解決するため、亜硫酸ガスから過燐酸石灰を製造することを目的に設立されました。愛媛工場は、住友化学(株)の事業発祥の地で、当社の歴史とともに変貌を遂げてきました。日本の近代工業の発展を背景に工業薬品の製造を開始し、1958年にはいち早く石油化学分野に進出しました。事業再編の一環で、エチレンおよび一部の誘導品プラントは1983年に休止しましたが、豊富な基幹原料をベースに、カプロラクタム、メタクリル樹脂などのバルク製品から、飼料添加物であるメチオニンなどのファイン製品、光学機能性フィルムなどのエレクトロニクス製品まで、積極的に製品の多角化を進めてきました。2009年には、光学機能性フィルムなどの製造ラインを有する大江地区が、大江工場として発足。新たな事業展開に柔軟に対応するとともに、当社の多様な事業を支えています。



新居浜市航空写真

### レスポンシブル・ケアの活動

**環境保全の取り組み**として、「環境方針」を内外に公開し、関係者の環境意識の向上を図り、また、環境マネジメントシステム「ISO14001」の認証を受け(1998年4月認証、2019年更新)、PDCAを回すことで、法令順守はもちろんのこと、継続的環境改善・保全活動を行い、地域(地球)環境にやさしい工場を目指しています。

その結果、大気や水質の規制項目の環境への排出実績などは、法律で規制されている値に比べて非常に低いレベルに抑えられています。今後も環境にやさしいプロセス改良に努力し、環境処理設備のきめ細かな運転、効果的な運用を行っていきます。



排水処理設備



ばいじん防止設備

**保安防災の取り組み**として、プラントの安全性と設備の健全性を確保(球形タンクへの耐震補強など)し、プラントの事故を未然に防止するためにリスク評価を実施し、リスク低減のため、安全対策の継続的強化や自主保安管理体制の充実を図っています。

工場では、大量の危険物等を取り扱っており、万が一の事故に備えて自衛消防組織、近隣各社で構成する共同防災組織による訓練を行うなど、防災体制の充実を図っています。



球形タンクの耐震補強

**労働安全衛生の取り組み**として、職場で働く人たちの安全確保と健康確保を行うことは、事業を進める上で大変重要なことです。そのため、愛媛工場・大江工場では「安全をすべてに優先させる」という基本的な考え方の下に、安全・安定操業および健康確保ならびに実践的かつ高度な安全衛生活動に取り組んでいます。

### 地域社会とのコミュニケーション

住友化学グループは、サステナビリティの推進を「事業を通じて持続可能な社会の実現に貢献するとともに、自らの持続可能な成長を実現する」と定義しています。

この考え方にに基づき、愛媛工場・大江工場では「地域との共存共栄」の精神から、催事への協力、理科教室の開催、清掃活動など、地域と共に歩んでいます。

また、地域に密着した活動を継続していくため、定期的に地域自治体や学校関係者などとの情報交換や工場見学会といった交流の場を設け、これまで以上に「開かれた工場」を目指しています。



▲地域の方への講演・講話

▶サイエンスイベントへ理科教室出展

# 2020年度RC地域対話

## 書面による開催

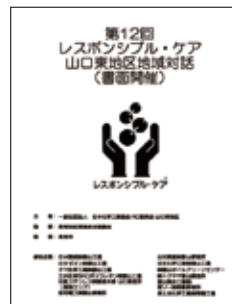
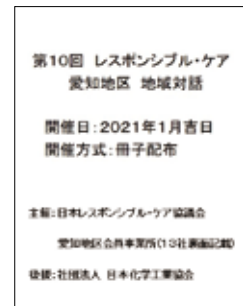
レスポンシブル・ケア(RC)活動では、その活動の成果について様々なステークホルダーとの「対話」を行うことが重要な活動の一つであると位置づけています。なかでも工場近隣地域の住民との対話は重要なものの一つであると考え、1997年に千葉、山口の両地区において地域対話が始まりました。現在ではRC委員会会員企業の工場が多く立地するコンビナート地区を中心に、比較的広域で行う地域対話としては国内15地区において、近隣住民と企業等が一堂に集まり対話を行うRC地域対話集会在定期的に開催されるようになりました。

地域対話は企業にとっても、住民に対し企業活動の理解を深めていただく場になるとともに、地域住民が日頃から抱えている疑問、不安あるいは期待などについて対話を通じて良く知ることができる場になるものです。対話の結果に基づき、企業がより住民の期待に沿ったRC活動を行うことができるようになり、信頼関係をより深めていくことができるものと考えています。

15地区の地域対話は、各地区基本的には2年ごとに開催しているもので、2020年度は当初、四日市、山口東、岡山、千葉、大阪、鹿島、兵庫、愛知、新潟北の9地区で従来通り集会方式にて開催される予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症対策のため、地域ごとに住民の意見などもいただいて検討し、2年ごとの対話を継続することにした山口東、千葉、兵庫、愛知の4地区は書面方式により開催しました。また従来通り対面方式での開催を継続することを重視したその他の地区は、2021年度以降に延期して対面方式で開催することとしました。

書面開催した4地区とも初めての書面による地域対話となりましたが、単に企業活動の説明資料を配布するだけで終わらせないように工夫を凝らしました。例えば、口頭説明がなくなった分、それを補うように読みやすさや分かりやすさを重視した内容の書面配布を行う、配布した書面内容や日頃からの企業活動に対しての質問や意見を住民から集める、それらに対する企業からの回答や説明をさらに書面配布にて行う等々、書面開催とは言え「対話」を行うことに配慮して、地域対話が開催されました。

地域対話15地区



住民配布資料

## オンラインによる開催事例(宇部地区)

工場近隣地域の住民と企業とのRC活動に関する対話ということでは、上述15地区以外でも1社単独あるいは近隣の少数の企業が共同して、定期的に住民とRC活動に関する対話を行っているところが多数あります。2020年度はこれらの対話が行われているところでもほとんどが開催を延期したり、書面開催に変更したりしました。その中で宇部地区では感染症対策を考慮しながらも定期的な対話を継続したいということと、書面開催よりは密度の高い対話ができることを期待して、オンラインでの地域対話を開催しました。幹事会社会議室を拠点に、住民、企業、行政、その他関係者などがオンラインで参加し、特に住民には高齢者が多いこともあり、各自治会に近いふれあいセンターの十分に広い会議室に少人数ずつ参加いただくことで感染症対策に十分配慮して開催されました。このような地域対話をオンラインで開催するのは初めてであり、また参加者もオンライン会議に不慣れな方も多いため、期待通りに対話ができるかが心配されましたが、ファシリテータの巧みな進行もあって住民から質問や意

見を多く引き出し、初めてのオンライン地域対話は成功裡に終了しました。

オンライン地域対話



## 大阪地区・東京地区 消費者対話集会

消費者対話集会は、消費者団体と化学企業とが率直に意見交換する場として、東京、大阪両地区で毎年各1回開催しているものです。消費者団体からは、立場の違いから主張は異なることがあっても、対話の機会を定期的に作っている化学企業に対し、高い評価をいただいています。

最近では、消費者団体の方にRC委員会会員企業の活動を実際に肌で感じていただくために、会員企業の工場や研究所などを会場として開催を行ってきました。しかし2020年度はコロナ禍のために、例年と同じように対面で開催することは難しいと判断され、消費者対話としては初めての経験となるオンラインにて、第24回東京地区消費者対話集회를11月10日に、また第17回大阪地区消費者対話集회를11月25日に開催しました。

2020年度の対話テーマとしては、最近続いてはいましたが、消費者にとって大変関心が高いことよりプラスチックごみ問題をメインに取り上げました。東京、大阪両地区とも基本的に同じプログラムとし、企業側から話題提供を兼ねての講演を行い、その内容についての意見交換を行うという形で進めました。

プログラムは、①「海洋プラスチック問題に対する化学業界の取組み」と題して日化協より、②企業の活動事例紹介として、対話WG委員各社より、③「生分解性プラスチックとバイオマス由来プラスチックの環境に優しい使い方－国際標準規格や認証制度の活用－」と題して国立研究開発法人 産業技術総合研究所イノベーション推進本部標準化推進センター標準化オフィサーの国岡正雄氏より講演が行われました。

①「海洋プラスチック問題に対する化学業界の取組み」では、現状認識、内外の動向、産業界の動向、プラスチックごみ削減に向けた化学業界の取り組み、海洋プラスチック問題対応協議会(JaIME)の取り組みなどについて説明がありました。

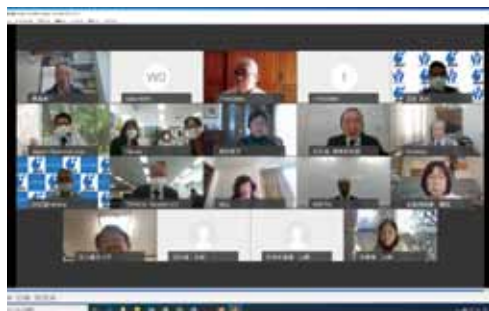
②「企業の活動事例紹介」では、生分解性ポリマーの製造やケミカルリサイクルの取り組みなどについて、各社のプラスチックごみ削減の対応状況の説明がありました。

③「生分解性プラスチックとバイオマス由来プラスチックの環境に優しい使い方－国際標準規格や認証制度の活用－」では、バイオプラスチックの役割と概念、生分解性高分子につ

いての国際標準化の必要性和バイオリサイクルによる再資源化の事例、バイオマス由来高分子についてのバイオベース度のルール作りの重要性などについて、詳細な説明がありました。

以上の講演に対する質疑応答では、生分解性プラスチックの今後のISO規格化の予定、海洋プラスチックゴミの現状、海洋中での生分解性評価の状況、ケミカルリサイクルの今後の展望、プラスチック削減のための各社のイノベーション努力について、コンポストでの生分解プラスチックの分解速度、バイオマス原料としての藻類の実用化の現状等々について質疑および意見交換が行われました。

初めてのオンライン消費者対話であり、オンライン会議自体不慣れな参加者もおられたことで、これまで同様に活発で有意義な対話ができるかが心配されましたが、結果的には、想定した質疑応答時間が足りなくなるほどの活発な意見交換が行われました。そして、参加いただいた消費者団体側からは、プラスチック問題に関わる知見を深めることができる良い機会になったとの評価もいただくことができました。



東京地区消費者対話



大阪地区消費者対話



国立研究開発法人 産業技術総合研究所  
国岡正雄氏講演



## 1. AMEICC化学産業WGによるアセアン支援活動

### 1) 日・アセアン化学産業人材高度化支援

AMEICC (WG-CI)の3年計画の中で2019年度には労働安全、運転安全の改善のためASEAN各国を訪問し、製造工場のラインマネージャー対象の2日間のプログラムを実施するという経済産業省の提案が受け入れられ、AOTSを通じて日化協への協力要請に応じて研修を実施しました。2020年1~2月に5カ国(タイ、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、フィリピン)に関しては、現地での研修を実施できましたが、3月に実施を予定していた3カ国(ベトナム、ラオス、マレーシア)は、コロナ禍の影響で中止となりました。このため2020年度に入り、経済産業省と残りの3カ国に対する現地開催を模索しておりましたが、コロナ禍の影響が継続していることから、開催方法をオンライン講義に切り替え、11月~12月に3カ国(ベトナム、ラオス、マレーシア)の研修を日本から実施しました。

### ①ベトナム(11月10日~11日)

ベトナムは、商工省が中心となってハノイで開催し、41名が参加され、オンライン講義を実施しました。コロナ禍の影響により、演習問題のグループ討議ができないので、講師が議長となり、多くの人に原因を発表してもらいました。いろいろな視点からの原因が発表され、自分では気づかなかった他人の意見を聞くことができ、新たな気づきを肌で感じる良い機会となりました。また、日本語版e-ラーニング教材をベトナム語に翻訳した教材を用いた教育を実施する予定でしたが、システムトラブルにより、紹介できなかったことが残念でした。



### ②ラオス(12月7日~8日)

ラオスは、商工省が中心となってビエンチャンで開催し、27名が参加され、オンライン講義を実施しました。コロナ禍の影響により、演習問題のグループ討議ができないので、ベトナムと同様の形式で演習を行いました。演習問題が爆発、火災事故の事例であったため、化学工業以外の参加者には、少し難しかったようでした。



### ③マレーシア(12月21日~22日)

マレーシアは、労働安全衛生部が中心となってプトラジャヤで開催し、28名が参加され、一部会場に参加できなかった人はオンラインで参加するという体制で、日本からオンライン講義を実施しました。コロナ禍の影響により、演習問題のグループ討議ができないので、ベトナムと同様の形式で演習を行いました。また、日本語版e-ラーニング教材を英語に翻訳した教材を用いた教育も実施しました。



### ④今後の展開

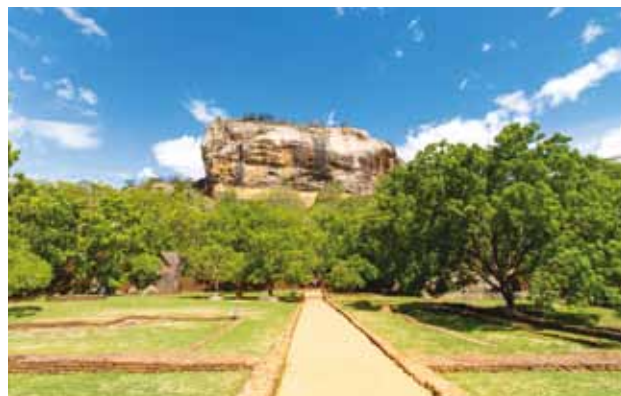
今回使用した教材は、6カ国においては現地語で、英語が共通語としてよく使われている2カ国については英語で実施しましたが、今回使用された現地語の教材は、今後とも広く利用することを心掛けたいと思います。また、日本語のe-ラーニング教材から、英語以外にタイ語、インドネシア語、ベトナム語の教材も一部作成できましたので、こちらも広く利用することを心掛けていきたいです。





## レスポンシブル・ケア リーダーシップグループ (RCLG) 会議

RCLGは、国際化学工業協会協議会 (ICCA) 内でRC活動の推進を担当する組織です。例年RCLGでは、春と秋の年2回、加盟協会のいずれかの国に各国協会の代表者が集まり、2日間に亘って対面の会議を開催していました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、昨年の春・秋に続き、今年の春も対面での会議を行うことができず、代替として、3月16日、17日に、3時間ずつのバーチャルミーティング(オンライン会議)が行われました。また今回の会議では、スリランカがバーチャルホスト国となり、会議が進められました。



スリランカの古都シーギリヤ

### 主な会議内容は以下の通りです。

1. (2021年7月から、2023年以降に延期されることが決まった)第5回国際化学物質管理会議(ICCM-5)にて、化学産業のRC活動をアピールするために集められていた各国協会版RC憲章への署名は、62協会中52協会が署名済みとなった。早期に残り10協会からも署名取得を目指す。
2. 欧州化学工業連盟(Cefic)が、欧州地域でのRC活動を再活性化するために2019年に開発したRC自己評価ツールを、世界の他の地域でも使えるように改良したRC自己評価ツールは、2022年第1四半期にリリース予定。日本語にも対応予定。
3. 米国化学工業協会(ACC)が、プロセス安全面から見たRC実践の経済メリットを試算した白書を発行。各国協会に、同種のデータを提供できないか打診あり。
4. ICCM-5にて、化学産業のRC活動をアピールする資料を作成する目的で世界の化学・石油会社の上位25社から提供を受けた重要業績評価指標(KPI)は、4月中旬に集計結果がまとまる予定。
5. エネルギーと気候変動(E&CC)LGは、キャンペーンビルディング(CB)活動に対するRCLGの支援を要請。
6. プラスチックLGは、各国協会が、その国の政府とプラスチック問題に関する話し合いをするために、どのような情報を欲しているかに関する情報提供を要請。
7. 7月に国連環境計画(UNEP)との間でCB活動の協力関係に関する覚書(MOU)を締結する予定。同時に、RC活動は、既に様々な面でSDGsに貢献していることをUNEP側にアピールする。
8. ICCAのRC Status Reportを、今年の7月に発行予定。
9. 各国協会が開催するRC関係イベントは、ICCAのHPに掲載し、ツイッターやブログなどを使って宣伝可能。
10. 今秋に予定されているRCLG会議も、バーチャルミーティングで実施する予定。

## APRO 会議

APRO (Asia Pacific Responsible care Organization: アジア太平洋レスポンシブル・ケア機構)は、アジア・太平洋地区におけるレスポンシブル・ケア活動の普及推進を目的として2年毎に開催されるAPRCC (Asia Pacific Responsible Care Conference: アジア太平洋レスポンシブル・ケア会議)の円滑な実施を支援することがその主目的の一つです。

これまで対面会議を年1回程度行ってきましたが、新型コロナ感染症の拡大により、2020年のAPRO会議は、11月12日にオンライン形式で開催され、2021年に予定されているAPRCCは、台湾がホスト国となることが承認されました。但し、新型コロナ感染症の状況が不透明だったため、詳細に

については2021年春に再度電話会議を行って決めることとしていました。

4月1日に2021年のAPRO会議が行われ、①台湾の感染状況は落ち着いており、順調に行けば2021年末頃には国境封鎖が解除される見込みであること、②台湾では感染が拡大しておらず、台湾国内の各種会議等は通常通り対面で行われており、オンライン形式の開催では多くの参加者が見込めないこと、③ワクチン接種の拡大により、2022年末には、世界的にも感染状況が収束に向かう可能性が高いと考えられることから、APRCCの開催を1年延期し、2022年第4四半期に、台湾で通常形式での開催を目指すことが決まりました。



# 2020年度 JIPS 賞

日化協は、第5回JIPS<sup>(注)</sup>賞を次のとおり決定しました。

- ・大賞：花王株式会社
- ・優秀賞：東ソー株式会社

JIPS賞とは、JIPS活動(サプライチェーンを考慮した化学品のリスク評価やリスク管理に関する自主的な活動)で顕著な取り組みを行った企業を表彰する日化協の制度です。2016年度から行っており、今回で5回目となります。

JIPS活動は、国際化学工業協会協議会(ICCA)で決定された国際的な化学品管理に関する取り組みであるGPS(Global Product Strategy)活動の日本版です。これは、各企業が自社の化学製品のリスク評価を自主的に行い、リスクに基づく適正な管理を実施するとともに、安全性やリスクに関する情報の公開を通じて、サプライチェーン全体での化学品のリスクを最小限にすることを目指しています。

日化協では、JIPS活動を推進するために安全性要約書(GSS:GPS Safety Summary)の作成を推進しています。GSSは、化学品を適切に管理するための情報を社会全体で共有して健康や環境へのリスクを減らす目的で作成するもので、企業が製造販売する化学品に関するリスク評価結果などを分かりやすくまとめたものです。



花王(株) 左から 林氏、亀山氏、小池氏、山根氏

2020年度JIPS賞は、大賞に花王株式会社、優秀賞に東ソー株式会社を選出され、それぞれの賞が贈られました。

なお、2020年3月末までにJIPS活動により会員企業/団体が作成した592件のGSSは、日化協が提供する化学物質リスク評価支援ポータルサイト“JCIA BIGDr”上で公開しています。

(URL: [https://www.jcia-bigdr.jp/jcia-bigdr/material/icca\\_material\\_list](https://www.jcia-bigdr.jp/jcia-bigdr/material/icca_material_list))

日化協では、様々な企画とともにJIPS活動の推進に努めてまいります。

(注) JIPS : Japan Initiative of Product Stewardship



東ソー(株) 横山氏

賞の種類	賞金	基準	受賞会社
大賞	25万円	・安全性要約書年間アップロード件数 ≥ 10件 ・件数最多企業1社	花王(株)
優秀賞	15万円	・安全性要約書年間アップロード件数 ≥ 10件 ・件数次点企業1社	東ソー(株)

# 東京産業安全塾 「特別講義」の実施

日化協、石油連盟および石油化学工業協会の3団体は、石油・化学産業において安全を推進するリーダーの育成を目的に、例年10月から3月にかけて、会場に3団体の会員企業から30名の受講者が参加する全16コマの「東京産業安全塾」を共催してまいりました。

2020年度は、新型コロナウイルスの影響により、残念ながら集合形式の塾の開催を中止としましたが、その代替として直近3年間の同塾受講生を主な対象としつつ、3団体会員の聴講希望者にも門戸を広げた無料の『特別講義』をオンライン開催することを企画しました。これまで3団体の保安防災・安全衛生活動においてご指導いただいた先生方や関係省庁の方を講師としてお招きし、2020年12月から2021年3月までの間に、毎月1時間合計4コマの講義を行いました。

今回の特別講義は、わが国の保安・安全の分野を代表される講師の登壇が叶い、またオンライン開催であったこともあって、全国各地の事業所から多数の聴講希望者があり、各回120～160名の方が受講されました。講義では、さまざま角度からリーダーとして保安・防災・安全に取り組む姿勢や、最先端のスマート保安技術に対する行政の動向などについて学ぶ良い機会となりました。毎回活発な質問があり、講師の先生方も塾である趣旨をご理解いただき、ひとつひとつ丁寧に分かり易くご回答いただきました。

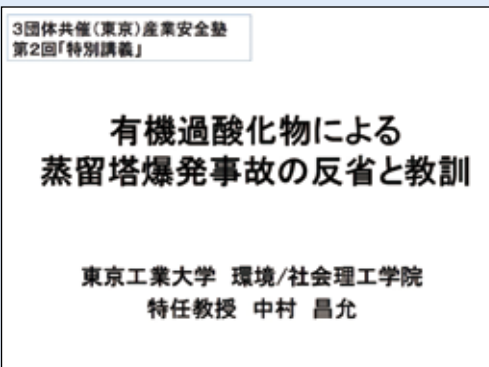
2021年度は、With／Afterコロナにおける新しい形を模索しながら、塾生を募集して塾を再開する検討を始めています。塾では、3団体の会員の本社・工場に在籍する安全管理担当の部・課長クラスの人材30名を対象として、安全文化を考慮した産業安全や現場力の強化を目的とした「産業安全の体系的な講義と討論を重視した講座」による人材教育とともに、人材交流・情報交流の場となることを重要な取り組みとしています。また、講師は、横浜国立大学教授三宅先生をはじめとして、関係行政の課長、安全専門家及び企業の安全統括者、安全部門のリーダー等の皆様が務めています。

詳細が決まりましたら、改めて安環ネットにて募集する予定です。企業の皆様におかれましては、今後とも産業安全塾を安全管理者、安全リーダー育成のプログラムのひとつとして、ご活用いただければと願っています。

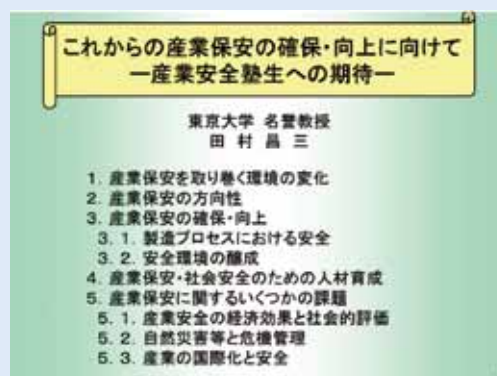
## 講師の方々とテーマ

**第1回(12月)** 横浜国立大学 三宅淳巳教授(塾長)  
「爆発災害とリスクアセスメント」

**第2回(1月)** 東京工業大学 中村昌允特任教授  
「有機過酸化化物による蒸留塔爆発事故の反省と教訓」



**第3回(2月)** 東京大学 田村昌三名誉教授  
「これからの産業保安の確保・向上に向けて」  
～産業安全塾生への期待～



**第4回(3月)** 経済産業省高圧ガス保安室  
阪本裕子室長補佐  
「高圧ガス保安行政の最新動向」  
～スマート保安を中心に

## Index

from Members【第86回】	2
三菱ガス化学(株) 取締役 常務執行役員 稲荷 雅人さん	
RCの現場を訪ねて (株)大阪ソーダ 松山工場 住友化学(株) 愛媛工場・大江工場	4
2020年度RC地域対話/オンラインによる開催事例(宇部地区)	6
大阪地区・東京地区 消費者対話集会	7
RC海外支援活動	8
レスポンシブル・ケア リーダーシップグループ(RCLG)会議/APRO会議	9
2020年度 JIPS賞	10
東京産業安全塾「特別講義」の実施	11
RC委員会だより	12

## RC委員会だより

☆会員動向 (会員数：118社 2021年4月末現在)

### 退会

- ▶大阪ガスケミカル株式会社(3月31日付)
- ▶ボゾリスソリューションズ株式会社(3月31日付)
- ▶昭和電工マテリアルズ株式会社(3月31日付)

### ☆行事予定

- 5月27日 日化協総会
- 7月6日 RC賞受賞講演会&RC活動報告会(詳細は日化協のHP上でも告知)

### 表紙写真の説明

#### MGCターミナル木江事業所の静寂夜景

広島県の瀬戸内海に浮かぶ、フェリーでしか往来できない大崎上島にある国内最大のメタノール貯蔵施設の夜は静かに更けていきます。夜が明けると、とびしま海道の島々が鮮明に映ります。

三菱ガス化学株式会社提供

### 編集後記

今年も春の訪れが早く、全国的に記録的な早さで桜が開花しました。しかし残念ながら、コロナ・ウィルスは1年経っても一向に収束せず、2年続けていつものような花見を楽しむことができませんでした。また本誌も、3度目の減頁を余儀なくされました。今年の夏は、予定通り“熱い夏”となるのでしょうか。

RC NEWSのバックナンバーは、以下のアドレスにてご覧いただけます。

▶ <https://www.nikkakyo.org/organizations/jrcc/rc-news-page>

